

役員からのメッセージ

認定特定非営利活動法人日本 IDDM ネットワーク 理事長 井上 龍夫



— 2012年度の振り返り —

2012年度の重要な取り組みの一つは私たちの活動のお手本とすべき米国の1型糖尿病研究財団であるJDRFへの訪問・調査を実施できたことです。詳細は昨年発行の1型糖尿病[IDDM]レポート2012にすでに示しましたが、この訪問から多くの事を学び、私たちの将来に向けた課題が具体的に見えてきました。JDRFは大きな資金的基盤の上に年間100億円以上の研究費助成を行っていますが、同時に医療機関とも連携した発症初期の患者・家族への徹底した支援、米国議会への大きな影響力で医療、福祉、医学研究への政策提言などをバランスよく行っています。私たちが日本のJDRFになるための手法のみならず組織活動の在り方や目指す方向性が明確になりました。

昨年度の具体的な成果としては大きく2つあげられます。ひとつ目は情報提供誌「1型糖尿病[IDDM]お役立ちマニュアル」の新刊2つを発行及びほぼ完成できたことです。昨年末にPart5「患者と家族の体験編」を発行し、さらに発行は今年5月までかかってしまいましたがPart3の別冊として「1型糖尿病[IDDM]関係者の東日本大震災」をほぼ完成させました。1年の間にマニュアル本シリーズ2つを発行・ほぼ完成できたことは過去にありません。これらの本の発行で、様々な場面に対応した情報提供によるきめ細かい支援活動が可能になったものと信じています。

もうひとつは1型糖尿病研究基金の活動に関連する事です。今年3月にシンポジウムを大阪で開催し、そこで行った新企画「サイエンスカフェ」が大好評でした。研究者と患者・家族の距離を近づけ、お互いがいい意味で刺激・交流することの大切さを実感しました。研究費助成としては2012年度末現在で、通算の助成件数で7件、累計金額で700万円とまだまだ小さいものの、今後の飛躍に向けた階段をひとつ登ることができたものと思っています。

— 2013年度の抱負 —

今年度、新しい役員として川崎直人理事が加わりました。川崎理事は当法人としては初めての常勤役員として活動します。さらに事務局体制や運営基盤も少しずつですが整いつつあり、ようやくの日本のJDRFを目指した活動のキックオフが可能になるものと思います。昨年8月の「認定NPO法人」格の取得により明らかに寄付も増えてきており、これからは寄付者や支援者へのさらなる情報提供など、これまでの私たちの弱点を徐々に強化できるものと思います。

NPOの運営基盤はその十分な資金源と、企画・行動力そしてなにより情熱にあふれた人材です。今年度は資金獲得とそのような人材確保、育成に力を入れ、来る2025年までには1型糖尿病を本当に「治る」病気にしてまいりたいと思っています。

副理事長 岩永 幸三

— 2012年度の振り返り —

2012年度もまた佐賀の(株)エヌワイ企画さん、東京の鮫島さんや高橋さんに無理なお願いをし、そしてボランティアの方々に助けていただきました。

細かな業務の指示に驚かれている方が多いと思いますが(笑)、全国初の所轄庁(都道府県・政令市)認定のNPO法人(寄付者等に税制優遇措置のあるNPO法人)になり、その求められるもの、責任も重くなりました。

そして、手伝っていただく方が増えるとまた新しい事業にチャレンジするということをやっていたような気がします。事務局を引き受けてから13歳年をとっており、体力は落ちていますが、精神力はまだ大丈夫かな~と思っています。2025年の1型糖尿病根治なんてものすごい目標掲げたのですから、まだまだやり残したことがたくさん。

— 2013 年度の抱負 —

これまでは患者さんから「“治る”なんて現実感がない」、「そんなことよりも他にやるべきことがある」と言われることが多かったのですが、最近は「治る病気になりそうな気になってきた」「治る病気になって欲しい」という声が増えてきたように感じます。

「治る」病気にするために、私達 NPO が寄付等で研究費を集めるその目標額は 100 億円です。2000 年の法人化以来今年 3 月末までで当法人に寄せられた寄付が 1 億円を超えました。その実績からすると 100 億円という金額は非現実的だと思われる方は多いと思います。しかし、私は、夢は見ない限り実現できないと思っています。

患者・家族のみならず、この「治らない」病気を「治る」病気にする—“不可能を可能にする”—挑戦に共鳴いただける方々とともに 2025 年にバカラ社のグラスで根治の祝杯をあげたいと思っています。

この 2025 年の社会変革に向けて、今年は 1 型糖尿病の社会啓発に力点を置きます。そして、治る病気になるまでは、発症初期に必要な情報が詰まったバックの配布 “Bag of hope プロジェクト” に新たに取り組みます。

専務理事 大村 詠一



【SNS の活用について】

2012 年 6 月から専務理事に就任し、私が最も注力してきたのは、日本 IDDM ネットワークの活動をより多くの方に、より正確に知ってもらうための情報発信でした。そのために、年に 30 回を越えるようになった講演会で、私の夢の 1 つとして「1 型糖尿病の根治」を掲げ、私たちの活動を紹介するようになり、患者さんだけでなく教育関係者や医療従事者からのお問い合わせも増えました。また、不定期更新ではありますが、Facebook や Twitter といった双方向でのやり取りが可能な SNS の活用により、以前よりも当法人が発する情報へのアクセスが増えたように思います。実際に、Facebook では 2012 年 12 月までは 1 記事に対して 150 リーチほどだったものが、2013 年に入ってから 300 リーチを越えるようになり、メディア出演の情報などでは 2000 リーチを越えることもできました。今年度は、1 記事に 500 リーチを目指し、アンケートやキャンペーンの企画にも取り組みたいと考えています。

【JustGiving について】

昨年度から挑戦してきた JustGiving という寄付集めサイトでのプロジェクト (<http://justgiving.jp/c/7960>) で、2013 年 4 月に目標としていた 10 万円 (1 型糖尿病研究基金による 1 件の助成額 10 分の 1 相当) を達成することが出来ました。今年度は累計 30 万円を目標に、1 型糖尿病の啓発を含む講演を行いながら、サポーターを増やしていきたいと思っています。将来は、これだけで年間 100 万円を集めるプロジェクトへと成長させたいと思っていますので、応援をよろしくお願いいたします。

【1 型糖尿病研究基金の成長について】

2005 年に設立された基金は、ついに 2013 年度の助成により設立からの助成額が 1000 万円を達成しました。特に昨年度と今年度だけで半分にあたる 500 万円の助成を行っており、この成長を本当に嬉しく思っています。1 年でも早く単年度に 1000 万円以上を助成できるような基金に成長させていきたいと思っていますし、そうすることがより良く、より早い根治へ向けた研究の後押しにつながると考えています。

【チャリティーウォークの開催について】

昨年、私たちが参考とし、目標としている米国の 1 型糖尿病研究財団の JDRF を視察して最も行いたかったプロジェクトが、チャリティーウォークです。2013 年度から私の地元熊本で初開催し、ひな形を作り上げて 2014 年度からは全国各地で開催できるようになればと意気込んでいます。楽しく歩きながら 1 型糖尿病について語り、一般の方への啓発もしながら、1 型糖尿病研究基金も応援できる! そんな素敵なウォークを目指して企画中です。皆さんも是非ご参加ください。

【最後に】

東日本大震災のとき、当法人の認知度の低さを再認識し無力感を感じてから 2 年、まだまだではありますが以前に比べれば患者さんやご家族をはじめとするサポーターとのつながりが深まってきたように思います。このつながりの輪をもっと大きくし、根治に向けた活動への賛同者を増やししながら、万事のときに備えたネットワークをより強力で安心できるものにしていきたいと思っています。

これまでの皆様からのご協力に感謝するとともに、これからのご協力もお願いします。一緒に 1 型糖尿病の根治に向けて、力を合わせていきましょう!

平成24年度(2012年度)事業報告 平成24年4月1日から平成25年3月31日まで

1 事業の成果

■ 日本 IDDM ネットワークの3つの約束

インスリンの補充が必須な患者とその家族一人ひとりが希望を持って生きられる社会を実現するために、平成22年度に“救う”“つなぐ”“解決”の3つの約束を掲げました。

そして、平成23年度に開催した日本 IDDM ネットワーク法人化10周年・1型糖尿病研究基金設立5周年記念シンポジウム開催を機に、最終ゴールは、2025年に1型糖尿病を「治らない」病気から「治る」病気にするにとしました。

その実現のための平成24年度の主な取り組みは以下のとおりです。

■ “救う”－患者と家族の皆さんに私たちの経験を還元します。

地域患者・家族会への助成金の交付や講師の斡旋・派遣、20歳以上の患者支援策実現、特別児童扶養手当の適正な認定事務の徹底、介護職員によるインスリン注射の実現、海外で使用可能な先進的医療デバイス類の早期承認と患者負担の軽減、及び運転免許規制等に対する政策提言、患者の祖父母や学校・幼稚園等での説明用パンフレット、血糖測定器等を入れる「キティちゃんポーチ」、ジュー C グルコース及び1型糖尿病 [IDDM] お役立ちマニュアル Part1～5の配布、電話・メール等での相談対応、ホームページのリニューアル、会報の発行などに取り組みました。

特に政策提言では、20歳以上の患者支援策実現に向けてロビー活動を展開しましたが、実現には至っておりません。常勤職員不在の中でたいへん苦しい状況ですが、次年度もこの取り組みは優先課題として取り組みます。

新たな取り組みとしては、1型糖尿病 [IDDM] お役立ちマニュアル Part5 (患者と家族の体験編) を発行し、同 Part3 (災害対応編) の改訂版も作成しました。このお役立ちマニュアルシリーズは好評で、紀伊國屋書店様をはじめ、医学系出版社等からも引き合いが来ており、寄付ではなく出版に向けての検討に着手したところです。

なお、ホームページは依然として改善の余地がありますが、情報は充実しているという評価もいただき、アクセス件数は前年度比2倍へと大幅に増加しました。

■ “つなぐ”－患者・家族と研究者、医療者、企業、行政、そして社会とつながります。

インスリンポンプとカーボカウントのセミナーは、出席者の7割が医療関係者でもあることから、確実に医療・療養環境の充実につながっていると認識しています。

また、村上龍氏(作家・映画監督)が編集長を務めるメールマガジン JMM (約10万人に配信) ほか、全国各地の新聞やテレビ等で私たちの活動が数多く取り上げられ、1型糖尿病の認知度向上につながったものと考えます。

さらに、当法人が本格的に1型糖尿病の社会啓発に取り組むための手段の一つとして、放送作家のご夫妻にプロボノ(職業上のスキルをいかしたボランティア)で絵本(1巻「わたしと病気のおはなしの巻」、2巻「かぞくのお話しの巻」、3巻「1型糖尿病という病気のお話しの巻」)を日本語と英語併記で作成していただきました。役職員の対応のまずさで印刷が遅れてしまいましたが、次年度早々には完成します。

そして、平成23年3月11日に発生した東日本大震災の経験を風化させることなく、その教訓を伝えるためにも「1型糖尿病 [IDDM] お役立ちマニュアル Part3－災害対応編－別冊 1型糖尿病 [IDDM] 関係者の東日本大震災」を発行すべく被災地を再度訪問し編集作業を行いました。平成25年5月の完成予定です。

■ “解決”－研究者の方々に研究費を助成し、1型糖尿病の根治への道を開きます。

1型糖尿病の治療につながるあらゆる先進的な研究を応援する「1型糖尿病研究基金」による第4回の研究費助成(2件200万円)を行い、5回目の公募も開始しました。2年連続の研究費助成は当研究基金設立以来初めてのことで。

『1型糖尿病 2025年「治らない」から「治る」へ』をテーマに据えたシンポジウムは、今回の大阪開催でも大盛会でした。1型糖尿病を「治る」病気に変えようとしている医療者・研究者の方々と患者・家族とがその想いを語り合うことで、「治る」病気になることへの期待感が高まっています。

1型糖尿病の根治のためには、2025年までに100億円の研究費助成を想定しています。

このため、寄付に対し税制優遇措置が受けられる認定特定非営利活動法人として、平成24年8月3日に全国初の所轄庁(都道府県・政令市)認定を受けました。

当法人主催のイベントをはじめ、阪神タイガースの岩田稔投手の1勝10万円寄付、個人からの100万円を筆頭とする多くの方々からの寄付、ノーモア注射マンスリーサポーター(1口2,000円を毎月口座から自動引き落とし:2,000円は、ひと月のインスリン注射費用の概ね半分に相当)、ノーモア注射希望の本プロジェクト(家庭や職場で不要になった本を提供していただき寄付へ)、書き損じはがきプロジェクト(家庭や職場にある書き損じ、未使用のはがきを提供していただき寄付へ)、Just Giving Japan(オンライン上のチャリティプログラム:大村詠一専務理事等が挑戦)での“ノーモア注射2025”プロジェクト、寄付つき商品等多彩なメニューによる取り組みもあり、本年度の1型糖尿病研究金には5,900,323円(前年度比2.3倍)という過去最高の寄付がよせられ、平成26年度まで3年連続の研究費助成が可能となりました。

こうした寄付メニューの中でも「希望の自動販売機プロジェクト」は、企業、医療機関、公共施設、寺院等にご協力いただき、累計設置台数が27台(前年度比24台増)となりました。この自動販売機は、売上の一部が寄付になるだけでなく、1型糖尿病のことを掲示しており、病気の啓発にも寄与しています。

また、FUNKY MONKEY BABYS関係者の皆様のご協力により「涙」を収録した“1型糖尿病 2025年「治らない」から「治る」へ 私たちの挑戦への『参加』のお願い”のDVDを作成することができ、今後の研究支援活動や1型糖尿病の啓発に大きく寄与するものと考えます。

一方で、チャリティコンサートは企画途中で人的対応が困難になり断念しました。

JDRF(米国1型糖尿病研究基金)調査は、井上龍夫理事長と大村詠一専務理事が渡米し、研究支援活動、患者・家族への支援活動、年間約100億円以上というファンドレイジング(資金調達)等の現状を学びました。この調査で得られたものは順次平成25年度から実践に移します。

さらに、平成23年1月に発足した『1型糖尿病「治らない」から「治る」—“不可能を可能にする”—を応援する100人委員会』の委員が96名となりました。ノーベル医学・生理学賞を受賞された京都大学iPS細胞研究所長の山中伸弥氏をはじめ、作家・映画監督の村上龍氏、プロ野球阪神タイガースの岩田稔氏、理化学研究所発生・再生科学総合研究センター副センター長の西川伸一氏、株式会社大塚製薬工場研究開発センター特別顧問の松本慎一氏ほか様々な分野の方々に“参加”いただいております。今年度は新たにカバヤ食品株式会社代表取締役社長の野津喬氏など、18名の方々に加わっていただきました。委員の中にはご自身の名刺に100人委員であることを記載されており、1型糖尿病の啓発にも繋がっています。

こうした事業を通して、根治に向けての期待とその研究がより現実的なものとして認識されつつあり、2025年には1型糖尿病が“治る”病気になるよう取り組みを強化して行きます。

管理運営面では、業務拡大に伴い外部委託を進めて取り組みましたが、理事長は愛知県、事務局長は佐賀県で別に職業を持ちながらの活動のため、非効率で受託者にもかなりの無理を強いることになってしまいました。平成25年度の業務委託は何とか目処が立ちましたが、常勤職員不在の脆弱な組織運営体制の改善には至っていません。一方で、今年度も52名のボランティアに助けられました。特に1型糖尿病[IDDM]お役立ちマニュアルPart5(患者と家族の体験編)作成に当たっては、3名の患者のボランティアが責任を持って完成まで導き、患者の視点で内容の充実した体験談をまとめることができました。阪神タイガース岩田稔投手の患者との試合観戦・交流会では、大阪杉の子会の方に事務を担っていただきました。そして、イベント時のボランティア募集ではすぐに定員に達するようになりました。この52名の中から2名が次年度のコアメンバー(役職員)に加わります。

以上のように、日本IDDMネットワークは、ミッション達成に向けて、患者・家族のみならず一般社会を巻き込んだ共感の輪が広がりつつあります。

平成25年度(2013年度)事業計画 平成25年4月1日から平成26年6月30日まで

事業実施の方針

■ 日本 IDDM ネットワークのミッション（使命・存在理由）

平成 22 年度、日本 IDDM ネットワークは、「救う」「繋ぐ」「解決」の三つの目標を掲げました。インスリンの補充が必須な患者とその家族一人ひとりが希望を持って生きられる社会を実現することを目指します。

その最終ゴールは、1 型糖尿病を「治らない」病気から「治る」病気にする事です。

なお、本年度は会計年度変更に伴い、暫定的に 15 か月予算とします。

■ 日本IDDMネットワークの3つの約束

① “救う”—患者と家族の皆さんに、私たちの経験を還元します。

- 患者・家族への最新情報を提供し、最適な生活が得られるよう多様な選択肢を提示します。
- 医療や生活の相談充実に向けて、患者や家族同士による支援、教育、ピア・カウンセリングに取り組みます。
- 学校等での差別やいじめのない教育環境の実現を目指します。
- 就労の場での差別のない職場環境の実現を目指します。
- 20 歳以上の患者対策として、公的支援の導入により質の高い療養が継続できるよう提言していきます。
- 20 歳未満の患者対策として、小児慢性特定疾患治療研究事業や特別児童扶養手当といった既存制度の全国一律の運用、充実を提言していきます。

② “つなぐ”—患者・家族と研究者、医療者、関連企業、行政、そして社会とつながります。

- 医療機関、製薬企業と協力して、インスリン、ポンプ、SMBG、CGM といった多様な製剤、新しいデバイスによる療養環境の充実を図ります。
- 医療者と協力して、適切な食事・栄養指導を徹底させ、患者負担の軽減を図ります。
- 1 型糖尿病に対する社会の理解を図ります。
- 大規模な地震等の災害に備えるため、患者のとりべき行動を明らかにし、サポート体制整備への理解を図ります。

③ “解決”—研究者の方々に研究費を助成し、1型糖尿病の根治への道を開きます。

2005 年（平成 17 年）夏、私たちは新たな挑戦を始めました。『治らない』病気といわれてきた 1 型糖尿病を『治る』病気にかえるため「1 型糖尿病研究基金」を設立し、1 型糖尿病根治に向け情熱を持って真摯に挑戦する研究をサポートしていきます。

■ 平成25年度の主な取り組み目標

— “救う” 取り組み—

① 患者・家族のQOL改善に向けた政策提言

- 身体障害者福祉法改正による 1 型糖尿病の内部障害としての位置づけ等による 20 歳以上の患者支援策実現
- 配偶者控除制度の存続
- 介護職員によるインスリン注射が可能となる法整備の実施

② 発症初期に必要な情報が詰まったバックの配布

（Bag of hope プロジェクト）＜新規＞

③ 1型糖尿病[IDDM]お役立ちマニュアルPART2 —中級編— の増刷

—“繋ぐ”取り組み—

① 医療者、患者・家族ともに参加するセミナーの開催

カーボカウントとインスリンポンプをメインテーマに全国各地で年間 6 回程度開催します。

② 「1型糖尿病[IDDM]お役立ちマニュアルPART3—災害対応編—別冊 1型糖尿病[IDDM]関係者の東日本大震災」の作成及び防災等の啓発

③ 1型糖尿病を社会に理解してもらうための絵本(3巻セット)及びストーリー本の作成<新規>

—“治す”取り組み—

① 1型糖尿病「治らない」から「治る」—“不可能を可能にする”—を応援する100人委員会による社会的共感のアップ

政財界、研究、医療、NPO 等の関係者からなる 100 人委員が“治す”取り組み（ノーモア注射募金等）を強化します。

② 1型糖尿病「治らない」から「治る」—“不可能を可能にする”—を応援する100社委員会創設による社会的共感のアップ<新規>

企業からなる 100 社委員が“治す”取り組み（ノーモア注射募金等）を強化します。

③ 1型糖尿病研究基金による研究費助成

第 5 回研究費の助成 (3 件 300 万円) 及び第 6 回研究費助成の公募を実施します。

④ シンポジウムの開催

2025 年 1 型糖尿病「治らない」から「治る」—“不可能を可能にする”—をテーマにサイエンスカフェ方式で開催し、研究者と患者・家族との接点を強化します。

⑤ 1型糖尿病研究基金造成のための収益事業

絵本や 2025 祝杯グラス等の販売、チャリティウォークの開催等に着手します。

1 型糖尿病の絵本

～はなちゃんとびょうきのおはなし～

ねえ、知ってる？1日何回も注射をうたないといけない病気のおともだちがいる、っていうこと…この本の収益は、1型糖尿病を治る病気にするために挑戦を続けている研究者の方々への研究費助成のために活用します。

はなちゃんとチクリとびょうきのおはなし



定価 1,000円(税別)

パパとママとはなちゃんのおはなし



定価 1,000円(税別)

CURABLE by 2025!
1型糖尿病を2025年までに治します!



定価 1,200円(税別)

はなちゃんとびょうきのおはなし



定価 3,000円(税別)

3巻セット

3巻セットは特製カバーに入っています。各巻を別々に買うより2000円お得です。ぜひセットでお求めください。

Cheers to the cure of all people 2025

祝杯プロジェクト

美しい希望のクリスタルグラスで
2025年「治る」その日を
お祝いしましょう!

このグラスの収益も、根治に向けた研究費の助成に活用します。



▲ペアタンブラー
(4か所カッティング)…25,000円(税別)



シャンパングラス
(2か所カッティング)
…20,000円(税別)



1型糖尿病～2025年『治らない』から『治る』へ 私たちの挑戦への『参加』のお願い

日本IDDMネットワーク『応援メニュー』

私たちを応援していただくためには次のようなメニューがあります。

【メンバーとして参加する】

- 役員・ボランティアとして活動に“参加”する。
- 会員として“参加”する。

【不要なものを役立てる】

- 家庭や職場に眠っている“古本”を提供する。
- 家庭や職場にある“書き損じはがき”を提供する。

【周りに働きかける】

- 難病・慢性疾患患者支援自動販売機の設置可能場所を紹介する。
- ジャスト・ギビング・ジャパン (<http://justgiving.jp>) のサイトで日本IDDMネットワークへの寄付を呼び掛けるチャレンジを始める。

【サポーター企業と一緒に応援する】

- 1型糖尿病研究基金を支援する自動販売機の設置にご協力いただいているティエムアイランド様 (<http://www.tonyo-sp.com>) のスポンサーサイト「ショッピングモール」から商品を購入する(収益の20%が1型糖尿病研究基金に寄付されます)
- Medical ID(医療識別票)を有限会社プレシヤス・アイ (<http://www.medic-info.jp>) から購入する際に、クーポンコード(IDDM008)を記入する(売り上げの10%が1型糖尿病研究基金に寄付されます)
- 株式会社エヌワイ企画(佐賀県佐賀市柳町4-13 TEL0952-23-4258)に印刷物を発注する(売り上げの3～5%が1型糖尿病研究基金に寄付されます)※エヌワイ企画様の利益の一部から寄付されますので、発注者の方々に新たな負担は生じません。

【寄付をする】

- ノーモア注射マンスリーサポーターになる(毎月1口2000円以上)
- 寄付をする(1人3,000円以上)
注)認定NPO法人(寄付者へ税制優遇措置有り)であるためには3000円以上の寄付者が年平均100人以上あること等の条件を満たす必要があります。
- ジャスト・ギビング・ジャパン (<http://justgiving.jp>) のサイトで日本IDDMネットワークへの寄付を呼び掛ける患者等のチャレンジを応援する(寄付する)
- 遺贈(遺言による寄付)も承っております。

くわしくは 日本IDDMネットワーク Webサイトをご覧ください。

<http://japan-iddm.net>

2025年「治らない」から「治る」へ 研究を進めるために

“1型糖尿病研究基金”へご寄付をお願いいたします。

1型糖尿病を発症すると患者と家族は、「治らない」ことで絶望します。

しかし、医学・医療の現場では「治る」ことの実現に向けた挑戦が続いています。

皆さまから寄せられる寄付を当法人の「1型糖尿病研究基金」(2005年8月設立)に積み立て、1型糖尿病を“治す”ための研究に挑戦を続ける研究者の方々への研究費助成と社会の理解促進のための活動に活かします。

法人化10周年を経た2011年1月、NPO、企業、研究機関等各界の人達が集い、**1型糖尿病「治らない」から「治る」へ**—“不可能を可能にする”—というこの取り組みに対して多くの人の“参加”を訴える、**100人委員会**がスタートしました。

この「治らない」病気が「治る」という社会変革へのチャレンジに“参加”してください。

100人委員会 応援メッセージ



村上 龍 作家 映画監督

1922年、世界で最初にインスリン投与が行われました。まだ100年も経っていません。インスリンの補充ができなかった時代には、1型糖尿病は確実に死に至る病気でした。現在、すでに確立されている「すい臓移植」の他に、「膵島移植」や「人工膵島」、さらに「再生医療」「遺伝子治療」などの先端的な研究が進められています。「『治らない』から『治る』へ」という日本IDDMネットワークの指針は、人類の英知の結晶である生命科学への信頼と希望を象徴するものです。

日本IDDMネットワークでは、「1型糖尿病研究基金」を募っています。この基金へのご協力・ご支援を、多くの人にお願ひしたいと思います。この基金は、1型糖尿病の患者さんご家族への支援にとどまらず、生命科学、および医学への貢献にも寄与するものです。



山中 伸弥 京都大学 iPS細胞研究所長

私自身は糖尿病の研究はしていませんが、父が2型糖尿病で「インスリン依存状態」でしたので、とにかくインスリン注射を何とかしたいという思いがあります。そして私が所長を務める京都大学iPS細胞研究所(CiRA=サイラ)のこの10年間の再生医療による臨床応用のターゲットの一つが糖尿病です。ほんとうに糖尿病を何とかしたいと思っています。

日本IDDMネットワークが「1型糖尿病を治す」ための研究基金を作って研究費を支援されていることは本当に大切なことだと思います。そして同時に研究者たちとの接点や交流を持つ活動をされていることも重要なことです。私たち研究者の研究への大きなモチベーションは研究の成果を待っている患者さんがすぐそばにいることを知って、何とか貢献したいという思いなのです。また日夜、新しい治療の開発のためにがんばっている研究者がいるということを患者・家族の皆さんにも知っていただくことで、希望をもていただければと思います。

1万円集まれば……

1型糖尿病を治す基礎実験が5回できます。

100万円集まれば……

新しい治療法の開発が可能になります。

年間1,000万円で……

1型糖尿病根治を目指す研究者を10人応援したい!

1,000万円集まれば……

- ▶3~5年を目処に膵島移植の標準化の確立可能性が大きく高まります。
- ▶5~10年を目処にバイオ人工膵島移植の臨床応用へ大きく近づきます。
- ▶まだ基礎的な実験段階にあるベータ細胞再生治療の研究が大いに進展する可能性があります。

1型糖尿病研究基金のお振り込み先

みずほ銀行 佐賀支店

普通 口座名義/特定非営利活動法人日本IDDMネットワーク
預金 口座番号/1629393

ゆうちょ銀行

加入者名/特定非営利活動法人日本IDDMネットワーク
口座番号/01710-9-39683

※当法人のWEBからもご寄付いただけます。

日本IDDMネットワークは“認定NPO法人”です。ご寄付に当たっては、寄付金控除(所得控除・税額控除)、相続財産の非課税、損金算入限度額の拡大といった税制優遇措置を受けることができます。



「治らない」から「治る」へ
認定特定非営利活動法人 **日本IDDMネットワーク**

〒840-0801 佐賀県佐賀市駅前中央1-8-32 iスクエアビル3F 市民活動プラザ内

TEL 0952-20-2062 FAX020-4664-1804 info@japan-iddm.net http://japan-iddm.net/ 詳しくは [日本IDDMネットワーク](#)